

5th Futures Session
Across Borders
— Thu 21st March 2013



Overview

問題意識

社会の高齢化が進むにつれ、都市部で生活する人々のライフスタイルにも変化がおこると考えられます。そんな今こそ、私たちの生活をより豊かにする資源として都市郊外に位置する農的空間の役割、価値や活用の可能性を新たに見つめ直す機会ではないでしょうか？

第5回 Futures セッションは「Across Borders—地域・世代・セクターの境界を超えて、高齢化社会における都市郊外の新しいライフスタイルを構想する—」と題し、横浜市と川崎市の後援を得て開催しました。郊外住宅地における農地活用のモデルや、農地との関わりにフォーカスを置き、これまでとは違った都市と郊外の農的空間との私たちの関わりについて、行政、企業、NPO、社会企業家など、様々なセクターか

ら参加された約45名の方々と一緒に考えました。

セッションのプロセス

午前と午後の二部構成とし、午前中は川崎市早野地区と横浜市寺家地区でのフィールドリサーチ、午後は気づきを共有する対話の場としました。

以降、当日の流れに沿ってそれぞれのプロセスを通して何が生み出されたのか、詳しく見ていきます。

午前の部

ORIENTATION

横浜市青葉区にある「寺家ふるさと村四季の家」に集合し、フィールドリサーチの主旨説明とグループ分け、訪問先の紹介を行いました。

FIELD RESEARCH

グループに分かれ、各訪問先への取材と、川崎市早野地区・横浜市寺家地区の魅力や特徴を観察しました。

農に学ぶ環境教育ネットワーク（理事長 木村広夫氏）

持続可能な社会の実現と、真に豊かなコミュニティ創造のために、寺家ふるさと村をベースに、田んぼと畑の自然農を展開。ボランティアの他に会員もあり、環境教育としての農業に参加する機会を提供し、里山再生の必要性を伝えています。活動エリアが横浜市と町田市にまたがっているため、行政区画の壁を感じておられます。

子どものワークショップ（浦部利志也氏）

農を通して、子どもたちや地域住民に環境教育の場を提供するNPO法人として活動。

「食」「環境」「生命」について学ぶイベントを実施。20 年前から寺家の地主さんの協力のもと活動を続けていますが、地主さんの信頼関係を壊さないよう、地元住民のことを第一に考えるようになり、冒険ができにくく感じておられます。

minato furniture (湊哲一氏)

寺家で木組みのオーダーメイド家具を作る木工職人。横浜産材、秋田杉を使ったプロダクト制作、間伐材プロジェクトなど、様々なもの作り活動を展開しています。工房は 7 年前から仲間 3 人とシェアしながら借りていて、子どもや高齢者のために木工教室を開いて地域との関係を作られています。

陶芸家 澤岡織里部 (澤岡織里部氏)

寺家に工房を構え、食器、花器などの作品を通して、生活に潤いを与えることができればという想いから、白い磁器生地に、青い“呉須(ごす)”という顔料で絵付けした染付の焼き物を制作。寺家回廊というアート・陶芸・版画・木工など芸術・工芸活動を行っている作家を束ねたイベントを取りまとめられています。

のむぎ地域教育文化センター (樋口義博氏、樋口優子氏)

「地域の教育力の回復」ではなく「地域の新しい教育力の創造」を掲げ、自然環境豊かな寺家に 30 年前に拠点を構え、問題を抱えた子どもを支援しています。オープンコミュニティスクール、300 キロウォーキングや体験学校などを展開。未だによそ扱いなのと、地域のつながりを作る核になる人が居らず、若い人や地域とのつながりに課題を感じておられます。

アグロスつちの里 (大橋二郎氏)

63 歳でサラリーマンを退職後、寺家に畑を借り、年間 40 品目の野菜やお米を栽培。有機的な農業、そして有機的な人とのつながりを大切にし、『土』をつくり、「野」菜を育て、「里」(環境)を守りアグリセラピーをめざす』をモットーに活動。人手不足だが、周りの人と、楽しいだけのボランティアで



川崎市早野地区・横浜市寺家地区でのフィールドリサーチ

はない、報酬をお渡しできるつながり方を模索されています。

社会福祉法人グリーン (魚住亮氏)

寺家で 20 年、障害を持った方々が製造過程で農業を使わない野菜作りに取り組んでいる活動を支援。施設から畑までは車で送迎しているので、暮らしとは違う場所。収穫された作物は地域で消費されており、他の施設やバザーといったつながりの中で活用されている。収穫物を通じて利用者さんが社会貢献し、地域とのつながりを持てていると実感されています。

地域活動支援センターがあでん・ららら (大友わかさ氏)

精神にハンディキャップを持っている人が集まり、それぞれの個性・希望に合わせて、園芸、ハーブティー・クラフト作り、接客などに取り組んでいます。ハーブ園の運営については木の選定や庭づくりなど、専門家や力仕事が必要なこともあるが、近所の人のボランティアの力を借りて、自分たちだけでやろうとしないで運営されています。

社会福祉法人はぐるまの会 (福田真氏)

1983 年に、障害をもつ人々の「生活・労働・学習」を保障することを目指して、川崎市

ではじめてのグループホームを設立。一人ひとりの課題に応じた仕事を提供し、仲間と力を合わせて働くことを大切に、地域の方々との交流をととして地域で自信を持って暮らしていくことを目指しています。畑での作業時には地域の子供会や市民団体とも交流されています。

午後の部

OPENING

会場を横浜市青葉区にある「アートフォーラムあざみ野」に移し、対話のセッションを実施しました。横浜市温暖化対策統括本部 信時正人氏から、横浜の課題と取り組みを共有いただき、セッションを開始しました。

これからの都市計画としてのフューチャーセッション

都市計画を学ぶ人は知っている、英国のエベネザー・ハワードが提唱した田園都市計画というものがあります。田園と都市との結婚というコンセプトで、横浜も、環境未来都市を構想する上で、たいへん参考になっています。横浜の特徴は多様性です。近代都市も、農村もある。だが、田園と都市は



家庭内別居というのが現状かもしれない。横浜市の課題は、温暖化対策と超高齢化。2025年には、人口375万人中、65歳以上が100万人になります。単身世帯が2011年度で、すでに39.4%。高齢者も多く、結婚しない人も増えてきています。昨年の夏の環境イベントで、環境絵日記に1万人が参加してくれました。みなとみらいに畑や森をつくろう、海をきれいにして魚をとろう、という夢がたくさんありました。自分が子どもの頃の未来のイメージは、高層ビルだったが、今はまったく違います。都市計画は、産官学民がフラットにやる時代です。自治体の枠を超えて、国境を超えて、いろんなノウハウや衆知を集めて進める時代となりました。今後もこのようなフューチャーセッションが多く開かれることを期待しています。

INSPIRATION

早野・寺家地域にお住まいの方や、かかわりのある方からのインプット。

Presentation：東浦亮典氏（東京急行電鉄株式会社）

横浜市青葉区での次世代郊外まちづくり「農的ライフスタイル」の可能性について、プ

レゼンテーションを行いました。

郊外住宅が抱える基本問題は「まちの老朽化と高齢化、少子化」

江戸時代は、農業に携わる人が80%、商業が8%、現在は農業従事者3%で商業が63%、2020年には農業4%商業67%と予測され、人々の仕事は「農から商」に遷移してきています。また働き方についても終身雇用から、ノマドに代表されるような、1箇所に属さない新しい仕事の仕方に変わってきています。

東急は、人々の働き方、生活が大きく変化し、都心部が膨張することを見越して、東急多摩田園都市を開発してきました。2025年に日本は人口ピークを迎えますが、高齢化が急激に進んでいます。郊外住宅が抱える基本問題は「まちの老朽化と高齢化、少子化」です。

産官学民連携でまちづくりを

デベロッパーは、開発し利益を上げて終わりです。アフターサービスはしますが、取り組みは浅くなりがちです。自治体は税金をとって行政サービスを提供しますが、街の管理のみで、空き住宅・店舗などには口を出せません。住民は、まちの維持管理は自治体・町会に任せっぱなしです。郊外住宅も、入居当時と現在では大きく様変わりしていて、山、坂が多い場所が多く、高齢者の生活スタイルとまちづくりがミスマッチしています。また若い世代には、郊外は魅力的でなくなっています。ただ、団塊世代の大量リタイアは、チャンスです。PFI（Private Finance Initiative）など民間の多様な参加形態、開かれた大学など、まちづくりにいろんなセクターが関わるようになってきました。

次世代郊外まちづくり構想

横浜市・東急電鉄で、次世代郊外まちづくりの連携を宣言しています。これまでデベロッパーが関わったことが無いような領域

でも取組んでいきます。

WISE City（Wellness・Intelligence & ICT・Smart & Sustainable・Ecology & Energy）という発想のもと、高齢者施設、デイサービス、子育て施設などをコミュニティ・リビングというコンセプトで、コンパクトなまちづくりを構想しようとしています。

Talk session：北原まどか氏（NPO 法人森ノオト）・志水俊介氏（株式会社乃村工芸社）・湊哲一氏（MINATO FURNITURE）

本当に地域に愛着持ってもらえるハード・ソフトをどう提供できるか、問題提起しました。

志水：寺家の驚いたポイントは、ここは、明らかに「残されている土地」、管理されている、住民の努力で残されているところです。農業とアートは近いと思っていて、農作業はクリエイティブ。道具も自分たちで作る、自活するのが普通のことです。

北原：湊さんは、地域に新しい風土をつくろうとされていますが、地域の人との調和、地域でやってきたことは何ですか？

湊：ここ数年、寺家回廊という工房を開放するイベントで、地元の人との交流が少し





ずつできてきました。

北原：地元には素材はあるが、デザインして付加価値をつける必要があると思います。

志水：箱もののいけないところは、本当の意味で住んでいる人たちの資産、文化資源を外からきた人間が掘り起こせないことです。インフラやハードの設計はできるが、地域のステークホルダーを巻き込めていない。長い目線で使われること見越していない。運営、ソフト部分でも、地域の人たちを本当に愛着のあるものになっていかない。イベントのようなことはハードを作る前から設計しておかなければいけません。

北原：寺家には、農的空間に魅せられて来た人も増えてきたと思います。寺家をどう次の世代につないでいくか、ビジョンをお聞かせください。

湊：作家のつながりをもっと強くしていく、地元の方々と一緒に、強くすることはやっていきたい。故郷もすごく大事、秋田出身だが、秋田の活動と今住んでいるところをつなげられると幸せだと感じています。

志水：長く住む中で、どう愛着を持つかで文化が育っていくと思います。ここは芸術活動をするにはしやすい環境。子どもがいて、次の世代に移ったときに、子どもが自分の土地と思えるかどうかが大事だと思います。

北原：地域と関わりをもつことで、地域が好きになる。子どもたちが住む町だから、行政サービスを受けるだけでなく、生活という中で根ざしながら、自分たちがどう関わられるか土壌を作ることが大事だと考えます。



Interview: 大橋二郎氏（アグロスつちの里）

ー 自己紹介と、屋号についてお聞かせください

横浜市民歴三十数年、家庭菜園を長くやっていたんですが、農業経験はほぼゼロです。私たち団塊世代が一番地球を汚してきたと思って、罪滅ぼしに森林保全活動などに参加してきました。定年をキッカケに農家研修に参加して、寺家で新規就農しました。アグロスというのは、ラテン語でアグリの語源です。つちの里は、農業は土作りが基本なので「つち」を、作物である野菜の「野(の)」を、最後に農業を通じて「里」を守る、という語呂合わせで名付けました。

ー 有機農業で見習いたい人はいますか？

先日、富士宮の有機農家さんの見学会に参加しました。55歳でリタイアされて12年目に突入の方です。12年目と3年目の畑の質が違いました。12年の畑は何もしなくても8割の上質な野菜ができていました。微生物が育っている、土作りができるのに10年かかると言われた。

ー これからの後輩にアドバイスをいただければと思います

友人にも就農した人間がいるが、最近体力的にも厳しいと話していた、体力はあった方がいいでしょう。慣行農法だと堆肥などを入れて5年で立派な作物ができるが、自然農は、土ができるまでに時間がかかる、焦ってしょうがないです。

ー 土ができるまでに時間がかかるという点が印象的でした。代々受け継がれた農地ではなく、新規就農の難しさ、昔から農業をやられている方の難しさ、生産農地の維持の難しさを聞かせていただきました。十年かけてもまだ半人前、農業の技能の話ではなく、「土」が出来上がってない。土を作るのは時間がかかること。英国のカリスマガーデナーの方も同じことを言っていました。とにかく「待ちなさい」。手を入れれば入れ

るほど、うまくいかない、自然のペースに合わせて待つことが大事ということでした。

WORLD CAFE

ワールドカフェという手法を用い、参加者同士で対話しました。午前中のフィールドワークで得られた知見や、午後の早野・寺家地域にお住まいの方や、かかわりのある方からのお話を元に、農的空間との関わり方や、重要だと思うことを共有しました。

SCOUTING

対話の中で整理されてきた、農的空間に重要なことを各自が絞り込み、近い価値観を持っている人同士5名1組のグループに分かれました。

KEY GENERATION

各グループで、農的空間に重要だと思う考え方や視点を設定し、郊外と農的空間のよりよい関係をデザインするポイントを抽出しました。

PROTOTYPING

「郊外の農的空間×ライフシーン」から、新たな暮らしの文化を考える。

郊外と農的空間のよりよい関係を創りだしていくために重要だと思う考え方や視点を分かりやすく伝える30秒動画を作成しました。

MOVIE PREMIER

全グループのビデオ上映会を実施しました。
(次のページ参照)

CLOSING

最後に、今回のセッションの企画に構想段階から参加してきた川崎市の赤坂氏と横浜市の関口氏からコメントをいただき、セッションを締めくくりました。

赤坂慎一氏（川崎市 経済労働局）

川崎の早野、横浜の寺家も隣同士仲良くやっていくことが大事ですが、課題もあります。

新しい方々も参入し、農業の価値を感じている人たちがたくさんいます。我々に残された資源をどのように次の世代に引き継いでいくか非常に大事です。地元の方だけでもうまくいきませんし、行政が一方的に進めても難しい問題です。行政からの一方的な形ではなく、福祉、教育、芸術、文化など様々な活動されている方と、今回のようなフューチャーセッションを通じて一緒に空間を守っていきたいと思います。

関口昌幸氏（横浜市 政策局）

最後の各グループのビデオをみて感動しました。今回のセッションの準備を一から一緒にやらせてもらい、形になったのが良かったです。特に横浜と川崎の職員と一緒に活動できたのは、非常によいことでした。また通常は一緒に企画を起こすことはない市会議員の方と市の職員と一緒に関わったことも良いことでした。沿線の企業、自治体がそれぞれの枠を超えて、まちづくりができることは画期的なことです。今日で終わりではなく、次への第一歩として、これからみなさんと一緒に進めていきたいと思っています。



「郊外の農的空間 x ライフシーン」から、新たな暮らしの文化を考える 30 秒動画

各グループのビデオはこちら → <http://vimeo.com/album/2320305> からご覧になれます



タイトル：飛び込めば良かったなあー／覚悟
重要と思う点：地域に飛び込む覚悟が必要。



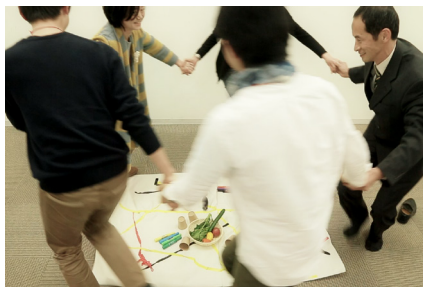
タイトル：あいさつ
重要と思う点：農的空間における価値、等価交換、
住む人とのコミュニケーションのキッカケ。



タイトル：競争から共走へ
重要と思う点：「時間をかける」ということが大事で、
一緒に作業することで継承していくことがある。



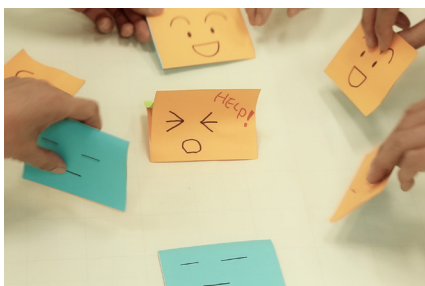
タイトル：プライスレス
重要と思う点：6次産業、付加価値の創造。



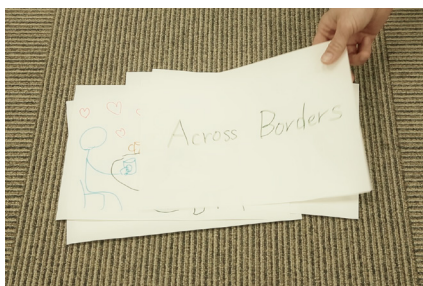
タイトル：ボーダーを超えてみんなでまわろう
重要と思う点：「循環」。



タイトル：マグネット
重要と思う点：きちんと食べ物を作られている状況
を消費者が知ること、作っている人も消費者の
思いを知ること、両者を現場で結びつけること、
農的空間が大事。



タイトル：自分が変わると周りも変わる
重要と思う点：地域の廻りに対して、地域に入る
人に「自分は活躍できる」という感覚ではなく、
地域の人に「自分ではできない」ことを共有して助
けてもらおうと仲間ができるという視点。外の人が入
って地域の人が助けられると周りが楽しくなり、
それを見ているさらに周りの人が魅力を感じる、
もっと地域が良くなる。



タイトル：アクロスボーダーズ
重要と思う点：気長なコミュニケーションが大事。
地元の人の考えを抜きに、近郊の人や他の地域の
人が話していても、ちょっと違うのではないかと
いう違和感があります。気長にコミュニケーショ
ン取ることが大事だと思いました。



タイトル：もらっちゃった
重要と思う点：時間をかけて信頼関係を築いてい
くことが大事だと思いました。時間軸の中で元々い
た人と入ってきた人の関係性が変わり、一緒に共同
作業ができるようになることが理想的だと考えま
す。



Spotlight

今回のセッションのテーマは「Across Borders—地域・世代・セクターの境界を超えて、高齢化社会における都市郊外の新しいライフスタイルを構想する—」でしたが、参加者はフィールドリサーチ、対話やグループワークを通じて、都市生活者と郊外生活者の理想的なつながり、農的空間のありたい姿を描きました。今回のセッションによって、都市郊外の新しいライフスタイルを構想するうえで、重要な視点がみえてきました。

暮らしの文化は、一緒につくることが新しい未来の生活スタイル

これまでの「都市生活者＝消費者」、「郊外の農的空間生活者＝生産者」という構造から脱却し、消費者・生産者の境界線がクロスオーバーになっていきながら、都市型の地産地消、コミュニティを形成していき、暮らしの文化として、未来の生活スタイルを一緒につくることが大事だという視点を持つことができました。

また、地元住民の方々とは「地元の人を引き立てる」、「時間をかける」、ことで関係性を構築していけるという気づきもありました。

世代の壁を超えるキーパーソンとしての高齢者

農的空間では、高齢者の方が生き生きと活動している姿が多く見られました。ここに残された豊かな自然環境、先人の知恵や技術をどう次の世代に伝えていくのか、大きな課題ではありますが、次の世代が担い手としての自覚を持ち、現役の高齢者の方々と行動を共にすることで、継承していけるものがあります。

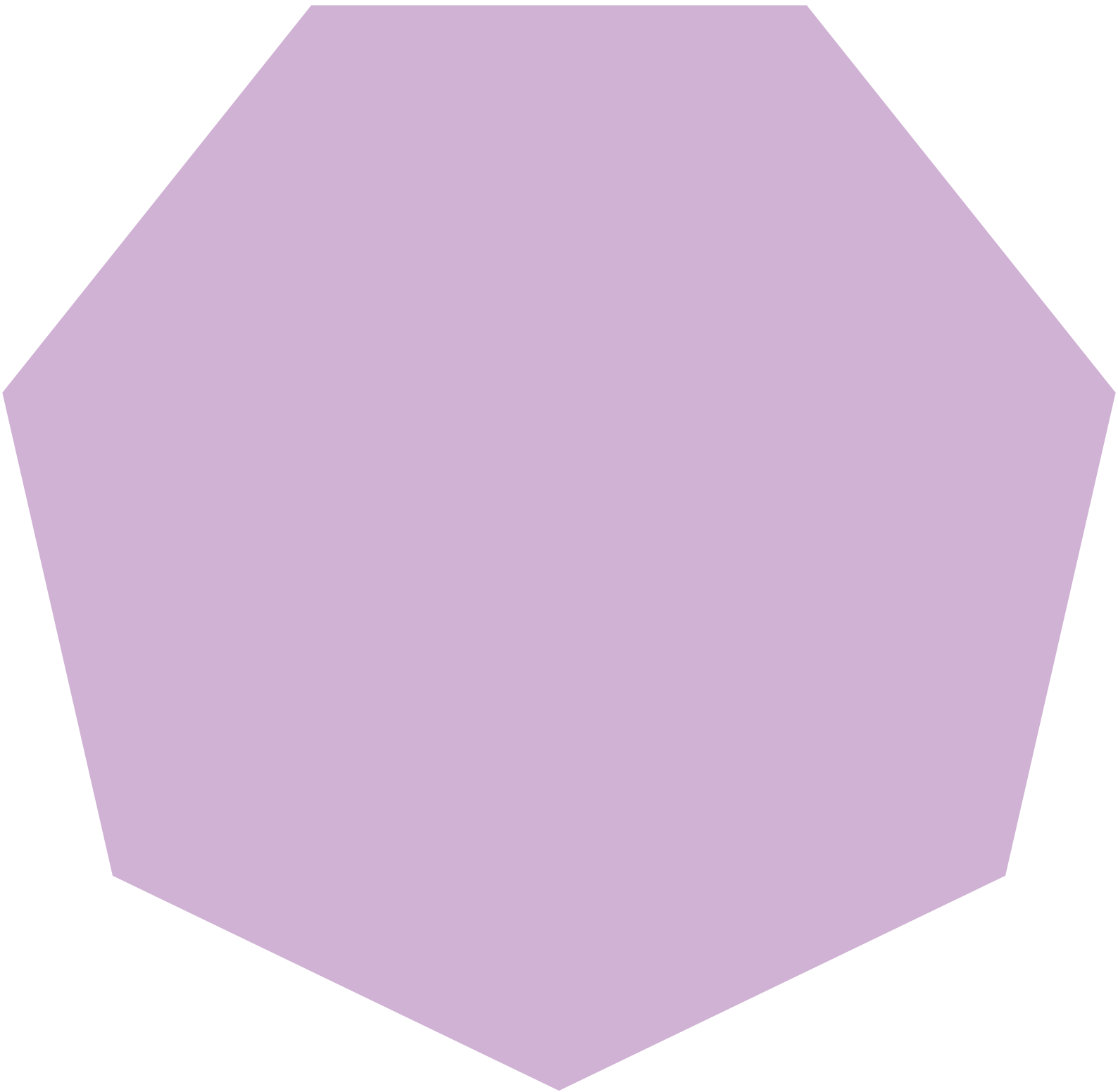
行政サービスを受けるだけの関係ではなく、地域や住民と関わりをもつことで、地域に愛着を持てるようになります。生活という中に根ざした活動をつうじて、地域住民のつながりの土壌を作ることが大事だと考えます。

セクターを超え、新しい視点を持つ

都市と郊外、川崎市と横浜市という地域・行政区の壁、高齢者と次世代という世代の壁、行政、企業、NPO や市民といったセクターの壁を超えた今回のセッション。行政の目線ではなく、市民の目線でもなく、企業の目線でもない、新しい視点で未来を捉えなおすことができました。

地域・世代・セクターの境界を超えて、新しい視点を持つのは Futures で開催するセッションの本質とも言えます。今後もさまざまな領域で Futures セッションを実施していくことが、真の社会イノベーションにつながるのではないのでしょうか。

今後創発される社会イノベーションが連携することで、どのような社会を実現していくことができるのか、今後の Futures セッションを通して、みなさんと一緒に描いていきたいと思います。



デザイン：hereticanthem co.,ltd.

発行：ブリティッシュ・カウンシル / 株式会社富士通研究所 / 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) / 株式会社フューチャーセッションズ

協力：NPO 法人農に学ぶ環境教育ネットワーク / 子どものワークショップ / minato furniture / 澤岡織里部氏 / のむぎ地域教育文化センター / アグロスつちの里
社会福祉法人グリーン / 地域活動支援センターがあでん・ららら / 社会福祉法人はぐるまの会

後援：川崎市 / 横浜市

2013 年 3 月 1 日発行 本書の無断複写・複製・転載を禁じます

© 2013 British Council, Fujitsu Laboratories Ltd., Center for Global Communications, International University of Japan, Future Sessions